



たてやま おらがんまつち

2017.3 No.35

南総祭礼研究会



館山市 館山地区

よ
町

- 制作年：明治中期
- 人形：国常立神
- 提灯：上町の牡丹文字
- 彫刻師：後藤義雄、後藤喜三郎橋義信
- 上幕：鳳凰
- 大幕：波と千鳥
- 半纏：上町の牡丹文字

近藤五



特異な意匠の囃子座正面の龍彫刻

囃子座正面の龍彫刻は両面彫の丁寧な仕上げ。
「龍」の裏には「波に鶴」が彫られている。

囃子座側面の竹に虎の両面彫

地域の紹介

自慢の山車

下町として商人が多く住む町方集落として栄えてきました。江戸時代からは、商人、職人、漁師、海運業者などが町内ごとに自立された町として活動が維持されてきました。

現在では城山下から浜へと延びる小さな地区に、百五十世帯ほどの人々が暮らしています。他の地域同様、子ども達が少なくなっていますが、祭りに向けお囃子の稽古などに余念がなく、町内に佇むお地蔵さんに見守られているような、和やかな地区です。

上町の山車は明治中頃に製作されたと伝えられており、彫刻は安房の名工初代後藤義光の高弟「後藤義雄」の作です。後藤義雄による山車彫刻は珍しく貴重な作品です。山車を見上げると、まず目に飛び込んでくるのが囃子座上を覆い尽くさんばかりの巨大な龍です。潔く扁額も探し、顎を開いた龍の姿は勇壮で今にも飛び出しきそうな迫力で、さらに囃子座上側面には龍にも引けを取らない勇猛な虎が竹林とともに彫り出されています。また一切の妥協を許さない

彫刻の技は裏側までも施され、そこに刻まれた鶴の彫刻は、囃子座で太鼓を叩く地区の人間以外はなかなか目にすることのできない代物となっています。そしてこれら三面の彫刻はすべて巨木の塊から彫りだされていて、重厚で見るものを圧倒させます。さらに、勾欄一段目の四隅には、真鍮製の擬宝珠に代わる「一木彫」の龍の彫刻が巻きついており、上町の山車の大きな特長となっています。この他にも四本の柱には「波と岩」、勾欄周りは「鯛や鰯」をはじめとした豊かな海が表現された無数の彫刻が所狭しと山車全体を彩っています。

上段幕は白の生地に鳳凰が、下段は波と千鳥の刺繡が施され、その上にそびえる人形は「国常立尊（クニトコタチノミコト）」であり、その御姿は勇壮な中にも優しを秘めた顔立ちが印象的です。

昭和五十三年に山車小屋ができるまでは、祭礼の度に山車を解体して倉庫に納め、地区の人々の協力で組み立てていました。昭和五十四年に山車の大修理、幕の新調を行い、平成十一年には土呂幕の新調、平成二十六年には提灯および梶棒の新調が行われた上町の山車は、今も昔も地域の人々に愛される自慢の山車として脈々と受け継がれています。



擬宝珠の代わりの一木の龍彫刻



特異な意匠の囃子座正面の龍彫刻



囃子座正面の龍彫刻は両面彫の丁寧な仕上げ。

「龍」の裏には「波に鶴」が彫られている。